



TITLE:

<批評・紹介> 長尾雅人著 「蒙古學問寺」

AUTHOR(S):

佐藤, 長

CITATION:

佐藤, 長. <批評・紹介> 長尾雅人著 「蒙古學問寺」. 東洋史研究 1948, 10(3): 221-224

ISSUE DATE:

1948-07-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/138883>

RIGHT:

蒙古學問寺

長尾 雅 人 著

昭和二十二年十月廿五日 全國書房刊
A 5 判 三四一頁 價 一五〇圓

ラマ教については我々はケツペン・ワツデル以來大約その内容と歴史を知らされ、それがいはゞ西藏佛教と稱すべきものであつて、何等佛教と離れた特殊な宗教ではない事が明かにされて來た。所がその密教的象徴的な色彩が痛く人の好奇心をそそり、特に日本に於ては嘗ての大陸政策の遂行に伴ひ蒙古が一般の視野に入るに従つてラマ教は奇怪なる様相を持つものとして紹介された。蒙古と云へば遊牧生活とラマ教であり、その豪放壯大な點と怪奇的な面樣、それに加へて特務機關的な封鎖性が此等を一個のロマンチズムに造り上げてしまつたのである。尤も此の氣分的なものも或る意味では蒙古を對象とする歴史的或は一般文化科學的な研究に與へた刺戟は見逃す事は出来ない。しかし反つて蒙古を學術研究の對象よりそらせる傾向をも馴致した事は否定する事は出来ない所である。ラマ教等は最も長くその様な狀態に放置された對象の一つでそれを内容的にたち入つて調査する事等は殆ど行はれなかつたと云つてよい。それで我々は橋本光實氏が川口・班禪ルートを傳つて内蒙に入ら蒙古の喇嘛教を著された時には實に多大の期待を以て之を迎へたのである。此の書によつてラマ廟なるものが印度大乘の學問研鑽の道場を持ち、それが如何なる學問をなして居るかと稍詳しく知らされた。惜し

むらくはその學問の性質が印度大乘と如何なる聯關のものであるかと把握されず、蒙古ラマの用ひる西藏語等が充記述されて居ない爲にその學問内容がかなり明瞭性を缺いて居た。此の最も知らるべくして知られなかつた點を實に明確に詳細に調査記述せられたものが茲に紹介せんとする「蒙古學問寺」なのである。

「蒙古學問寺」はその内容を四篇に分ち、第一蒙古學問寺、第二ラマ廟の建築樣式、第三ラマ教尊像について、第四スンバケンボの全集その他について述べて居る。その中第一は六章に分たれ序章、ラマ廟の分布と存在形態、學問寺の組織内容、貝子廟、五當召、ラマ廟の生活形態であるが、我々の最も興味をひくのは全體を通じて序章と學問寺の組織内容であらう。即ち著者は印度大乘の歴史的發展の跡をたどり、西藏に入つた佛教が中國等よりは數世紀も遅れ、いはゞ後期大乘と見なすべき形態のもので玄奘頃までの中國に傳はつたそれとはかなり内容的にも異なるべきを言ひ、それがそのまゝ西藏に受繼がれ蒙古に傳へられたものだとする。その時の印度大乘はかなり印度教との妥協、密教化、従つて大乘本來の在り方からすれば墮落的な佛教としてあるが之が西藏の如き未開の地に移入せられて所謂ラマ教的な形態のプロトタイプを形造るまでには、單に經典の直譯化によつて印度大乘を原典の形に於て保存した許でなく、その研學組織も當時のそれを殆どそのまゝ残したとする。茲にラマ廟特に學問廟の調査が佛教原典學・佛教教理史に於ける重要な意味を持つ事が理解せ

られねばならぬであらう。しかし著者は此の目的を達成する爲一應目標を貝子廟と五當召とに置き之を種々の角度より調査する。かくして學問廟の内容は「學問寺の組織内容」に整頓されて居るが、茲では學問廟は大凡顯教學部・密教學部・時輪學部・藥學部に分たれ、その學問形態が述べられる。

特に顯教學部に於て行はれる學問については橋本氏も一應のべて居り、多田先生の「チベット」に於ても同じ形で西藏にそれがある事が一應知られては居た。しかし此の學部の二十年の研學が殆ど大乘哲學の最高峰とする彌勒と龍樹の思想を對象として現觀莊嚴論・入中論を取り上げ、之をその廟の派祖の註釋をたよりとして學ぶ事、又は三十年を通じて因明・般若・中觀・俱舍・戒律がすべて論書を中心として學ばれる事等はこの書によつてはじめて茲に學問的に明かにされた事である。中國との大乘の相違は正にかゝる經に非ずして論を中心とする事、しかもそれは印度の當時の學習形態をそのまま受入れて研學し、教相判釋の行はれない事等にあるのである。此處の文章は實に我々にとつて金玉の文字と云ふべく、而して學派又は學年たるジンダの構成及び學習對象・方法に至つては橋本氏に於て不十分だつた西藏術語が詳細正確に還元せられて一見明々白々たるものがある。

以上の二章は特に我々がラマ教の基礎概念として最も今まで求めて止まなかつた所で氏によつてはじめて解答が與へられたものである。

第二の「ラマ廟の建築様式」は著者が自ら建築専門家なら

ぬ事を斷りながらも佛教建築としてラマ廟が如何なる形態を取るかを述べ中國佛教建築との差違をやはりその教學の點より説明する等頗る興味深々たるものがある。

第三の「ラマ教尊像について」は所謂ラマパンテオンの説明であつて、之等の紹介は今までも色々なされて居り、近くは逸見博士の膨大なラマ教美術寫真集等が出されて居る。しかし其等はいづれも學術的な解釋を與へられて居ない。所が本篇に於ては即ち各佛像の性格・意義又は組合せ等從來の缺陷が全面的に拂拭されて居る。特にラマ教の一大特徴たる抱合神の密教的意義については、先に氏の著した「蒙古喇嘛廟記」のラマ教の特色二二三頁以下を充分に讀合はさるべき性質のものである。

第四の「スンバケンポの全集その他」は學問寺所藏の版木の説明で之からしてその學問寺の學問系統・性格を明かにして居る。特に著者がスンバケンポの全集版木を發見した事は學界におけるすばらしい功績で若しこれが歐洲の學界に知られたならば彼等碧眼の碩學を驚倒させるに違ひない。本篇に於てはその目錄が詳細に述べられてラマ教の學問が如何なるものであるかを示したが、評者は國立北平圖書館に一部あるのを實見して居るし、終戦前に此の書を藏版するウスト召が中共の攻撃を避けて綏遠城に版木を遷したとの情報を得て居る。それ故いづれは我々がこの書を披見し得る時期もさう遠くない事と期待する。

以上で各篇各章毎に紹介したが、全體を通じて感想を若干

記したい。

先づ言語に就いてあるが、一體蒙古ラマ教徒の用ひる西藏語と云ふものは實に訛のあるものでよほど西藏口語の方言的差違を辨へて居ないと分りにくい事が多い。中央西藏語よりもかなり遠く、青海西藏語とも離れて居る點がある。例へばドンダ、ラマレン、シャガンズト、アリンジンバ、アゴワ、テビライ等がそれぞれ grub-mtshah・lam-rim・phyag-rnag・rab-hbyams-pa・ngag-pa・khri-pa bla-ma でありたりするのには何人も兎も脱がざるを得ないであらう。しかしその發音を聞いて西藏文字にて示せと云つてもそれを正しく記し得るものは寥々たるもので餘程の學者でない限り我々に満足な答を與へないのである。僅かな旅行期間でその地の學識豊かな高僧をとらへ之に以上の難點を速かに聞きたいのはそれだけでもかなりの苦勞であり、本書の至る所に見られる西藏語の蒙古發音とその綴字の一見背離的な併置は著者の還元の辛勞が籠つて居る事を感ぜしめられる。橋本氏の場合にドゴン、ハランバが mdo-mgon・lha-rab-pa であつたのが長尾氏の場合にはそれぞれ hdu-khan・lha-rang-pa と訂正されて居る。蒙古ラマ教徒には蒙古語の術語も用ひられて居るし、最初彼等の言葉を耳にした時その蒙藏いづれなりやの判斷に迷ふ事も少くない。倉に對するボツク・チス等もその一例であらう。著者はボツクを蒙古語として居られるが（一〇五頁）西藏語の *phlog* の變化形と見なすべきである。「給與」の意味であり、西藏にても官名に *phog-dgon* なるものが

あるのが参照となる。又ドクシトも蒙古語ではなく、*drag-sog* なる西藏語と解されるものである（二七〇頁）。*ジエン* *hon* (*dkyil-hkhor* (二八七頁) には「内とか集會の意味があり、宮殿の意味は直接に見出されない。」とされて居るが「壇場」の意として用ひられて居るのではないかと思ふ。古くは唐蕃會盟碑にその會盟の行はれた場所をやはりかく呼び、五體清文鑑にも同語にこの譯名の用ひられて居るのを見た記憶がある。因に著者は *lha-mo* に對して「サモ」なる音をあてゝ居られるが是は少しく疑はしい。元來 *lha* は西藏語獨特の音であるが蒙古人に讀まれる場合には *h* 音は *x* 音に轉化して用ひられ、その爲多少バラタライズされた感じを與へる。しかし尙之をシビラントの音として感じ取る事は到底出來なう。せいぜい「ハモ」とするのが原音に近いものである。

尙著者はラマ教の内面的な存在形態や存在理由を追求して行き、蒙古民族はラマ僧が蒙古民族を精神的に濟度する聖業であるとし、従つて廣大壯麗なラマ廟は民族の誇であるとして居る。故にラマ教は蒙古民族の間で盛大なものであるとの結論を出されて居る（一七七頁）。教理内容から云へば正にラマ教は世にも優れた宗教乃至は學問であり、蒙古民族が之を彼等の文化として敬愛し奉獻するのは當然と云はなければならぬ。しかしこの問題は彼等がさう意識して居る事のみを以てその原因となすべきものであらうか。その盛大さは社會の富に對して著しく不均衡であり、しかも内容に於て相當停滯的であるのは何故であらうか。別な學問の見地からすれば宗

教もやはり社會的存在であり、特に教團（教理ではない）がより廣く蒙古社會の各方面に於て果して居る何等かの社會的機能が明にされなければならぬと思ふ。此の觀點からすれば、氏も云はれて居る呪術的な點は正に格好の手がかりの一つを提供して居るのではなからうか。社會學的な取り上げ方を著者に要望するのは隨を得て蜀を望むの類ではあらうが此の書が余りにその方面の研究に貴重な資料を含んで居る感を深くするので敢て最後に非禮の言を述べさして戴く。

著者の計畫によれば之等の調査は豫備的なものであつて第二次第三次と本格的な學術調査を行ふ意圖のものであつたらしい。遺憾な事に現在では我々はもうその機會を持つ事は出來ない。しかし後期大乘研究の手がかりは此の書によつて相當に與へられる筈である。我が國に傳はるファストハンドの文献の膨大さを思ふ時、西藏學の前途の洋々たる事を思はずには居られない。終戦後の我が國學界の優れた業績の一つとして江湖に紹介し、併せて著者の今後の研鑽を期待してやまないものである。

〔佐藤 長〕